

令和2年度 前期 南中学校学校評価資料

10月作成

○短期経営目標 ☆本年度新たな取組 ◇取組状況 ◆成果 ●課題

中期目標 a 「教師の授業力向上（教師→教師）」 について

○生徒主体の学び・深い学びの場がある授業実践を積み重ねることで、「学び合い」の質を高め、「学び合い」を通して学ぶことの達成感・充実感を感じさせる。

方策1 主題研の4部会毎に「学び合い」の視点で主題に沿った単元を構想し、授業実践する。

- ◇主題研全体授業 10月27日（火）安間佑騎教諭
1年6組 数学「変化と対応」～関数の魅力を感じよう～
全体会講師 西尾市立幡豆小学校校長 横地 喜之 氏
- ◇部会研究授業 ・2月 織田 楓 教諭 家庭科 ・2月 池谷 奈菜 教諭 美術科
- ◇公開授業 上の3本を除き29本実施 ※今年度は年度当初の休校期間が続いたため前後期で分けず。
- ◆部会研究授業の移動案検討会の際には、4部会としての活動は積極的に行われていた。
- 一人一人の公開授業に対しては、4部会での動きは見られなかった。なかには、教科部会にも図らず、授業者一人で作成し、公開授業に臨んでいる職員もあった。
4部会や教科部会を機能させるためには、4部会と教科部会の役割を明確にする必要を感じた。
一人1授業公開の指導案検討をどのような流れで進めていくのか、誰が進捗管理をするのかなどを再確認していきたい。
さらには、その基本方針を主管するのは教務主任なのか主題推進委員会なのかも曖昧であった。
次年度は、まず教科部会で検討し、その後4部会で検討していく流れを確立していきたい。そして、その進捗状況を職員会などで定期的に確認していきたい。
そのために、4部会部長と教科主任が担当教科の授業者の公開日を把握し、先述した指導案検討の流れが時間的に無理なく進められるように、進捗管理の役割を明確化していきたい。

方策2 集団で課題を解決する場のある単元構想を構築するために、生徒の思考の流れを汲んで、追究課題を意図的に配列する。

【教師アンケートの結果】

問5. 生徒が自分の考えに理由や根拠をもてるような課題を示した授業づくりをしているか。	
あてはまる	4%
まあまああてはまる	61%
合計	65%

【生徒アンケートの結果】

問5. 自分の考えを言うとき、その理由や根拠をもっていますか。	
あてはまる	35%
まあまああてはまる	40%
合計	75%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

●本校の研究主題「学び続ける南中生」を掲げているが、実践状況は芳しくないことがアンケート結果からうかがわれる。公開する授業だけに生徒の主体性を期待するのではなく、単元を通して、さらには、単元を終えた後も対象に興味をもたせ続けるためには、生徒の思考の流れを意識した単元を仕組まないといけない。主題推進委員会の提案をふまえて、生徒の変容を実感する単元づくりに努めていきたい。

方策3 「学び合い」の質を高めるために、生徒の思考を支える発問・板書の工夫をしたり、対話の質を高める働きかけの工夫をする。

【教師アンケートの結果】

問8. 自分の考えと友達のことを比べる場面を授業の中に設定していますか。	
あてはまる	22%
まあまああてはまる	52%
合計	74%

【生徒アンケートの結果】

問8. 考えを伝え合う場面では、友達のことを自分の考えを比べて聞いていますか。	
あてはまる	27%
まあまああてはまる	41%
合計	68%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

●「方策3」についての意識については、生徒との差がある。このことは、教師が意識していけば、生徒の対話の質を高められる余地があることを示唆している。何のために「学び合い」をさせるのか、どのようにさせるのか、そのためにどのように、どんな考えをもたせたいのか、このことを念頭において、授業実践を重ねていく必要がある。

【授業参観シートの集計結果】

評価内容	Aの割合(%)
互いにかかわり合ったり、学びあったりする工夫があったか	52.9%
学習内容に応じた学習形態を工夫していたか	70.5%

教師の相互評価

A: A評価70%以上
 B: A評価50%以上

●今年度はコロナ感染拡大防止のため学習形態に制限があったため「学び合い」についてAの割合は高くない。ただし、今後解除されたとしても「活動あって学びなし」にならないように、その学び合いは本当に必要であったのか、きちんと見極めていかねばならない。

方策4 授業参観者用シート、「授業だより、授業メモ」で南中のめざす授業を示し、相互参観・執筆を通じて授業力を高める。

◇「授業だより、授業メモ」の取組は定着している。特に、執筆者については、目的が明確なので、主体的に参観する機会が保証されている。また、1～3年目の教員にも執筆を割り当てているので、授業の見方について学ぶ機会になっている。見る力の向上から授業力の向上へとつながることを期待している。

●「授業だより、授業メモ」の内容については、授業者の取り組みのよさを中心に、執筆者の主観に任されていることが多く、南中が目指す「学び続ける南中生」に迫る授業であったかどうかについて執筆するという統一感を感じられなかった。研究発表会が令和3年度から4年度に延期されたので、あらためて目指す生徒像についての共通理解を図り、それに迫る授業を重ねると共に、授業を見る力の向上を図りたい。

●主に役職者が執筆する「窓(授業メモ)」は、生徒たちに「どんな生徒に育ててほしいのか」を示し、その意味と価値を理解させるために、生徒向けの内容にし、生徒に配布するものである。「窓」の発行は定着しているが、執筆内容が「目指す生徒像『学び続ける南中生』の姿を共有する」ためのものに迫り切れていない。ここも上と同様、あらためて目指す生徒像についての共通理解を図り、役職者自らも、それに迫る授業を重ねると共に、授業を見る力の向上を図りたい。

中期目標b 「学級経営力の向上(教師→生徒)」 について

○級訓を核とした学級経営を行い、個々の個性を生かしながら、集団の目標に向けて協働しようとする生徒を育てる。

方策1 学年訓や学級訓をもとに室長会を柱に据え、生徒が自分で考え、行動できるようにする。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 13. 級訓や学級目標を達成できるように学級経営ができていますか。	
あてはまる	13%
まあまああてはまる	57%
合計	70%

問 13. あなたは、学級の「級訓」「目標」を意識して生活できていますか。	
あてはまる	20%
まあまああてはまる	41%
合計	61%

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

●「方策1」について、担任と生徒との意識の差が大きく広がっている。担任はそのつもりでいても、生徒にはそれほど伝わっていない。学級経営は学校行事だけでなく、日々の学校生活があらゆる場面で教育活動の場と捉え、どのように取り組む姿が望ましいのか、その活動を通して自分たちはどうありたいのか、担任として、意識を高く持ち続けて働きかけていく必要がある。

方策2 応援合戦、合唱コンクールをはじめ、学校生活全般において級訓を意識した取組、振り返り、評価を行う。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 14. さまざまな行事に対して、生徒が協力し合えるような支援・指導ができていますか。

問 14. あなたの学級は、様々な行事に役割を決め、みんなで協力していますか。

アンケート結果

あてはまる	26%
まあまああてはまる	43%
合計	69%

あてはまる	42%
まあまああてはまる	41%
合計	83%

(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

●「方策2」についても、担任と生徒との意識の差はさらに大きく広がっている。生徒たちは学校行事に高い関心を抱き、大きなエネルギーを注ぐ。担任が特段働きかけなくとも、各行事における生徒たちが望む姿は明確なので、その姿を学級訓に重ね合わせやすいのであろう。ただし、生徒が望む姿は表面的であり一時的なものである。担任としては、その行事の結果にこだわって終わってしまうような一時的な目指す姿で終わらず、年間を通して目指す姿をゴールと考えたときに、この行事の時点ではどのあたりまで育てておきたいかなど、長期的に見通しをもって計画的に指導・支援し続けていくようにしたい。

◇体育大会後の振り返りでは、級訓(学級目標)を意識したものが見られた。2年生の振り返りシートには、「学級目標()と照らし合わせて」の項目があり、2年4組の生徒は学級目標「期待草」をふまえて、以下のように記述していた。

・今日の体育大会では、みんなでがんばることができたので、草(クラス)が成長できたと思う。
 ※2年4組の級訓「期待草」には、「【楽しい」「協力」「努力」をキーワードに周りから得られた期待をエネルギーにして、力強く育つ草のように成長することをめざす」という思いが込められている。

さらに、学級の仲間へのメッセージとして、以下のように記述していた。

・なかなかうまくいかないこともあったけど、本番上手に踊れたので、次の合唱コン優勝めざしてがんばりましょう!!

☆特別な支援を要する生徒への支援・指導体制の確立・充実

方策3 不登校生徒の現状と指導方針を共有し、学校復帰、学級復帰に向けた支援をみなみ部会を中心に組織的に展開する。

【教師アンケートの結果】

問 25. 生徒たちは学校に来るのが楽しいと感じていますか。

あてはまる	17%
まあまああてはまる	74%
合計	91%

【生徒アンケートの結果】

問 25. 学校に来るのは楽しいですか。

あてはまる	44%
まあまああてはまる	33%
合計	77%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

問 12. 自分が教科で担当する学級をけじめのある学級になるように指導していますか。

あてはまる	26%
まあまああてはまる	65%
合計	91%

問 12. 自分の学級は、授業中、けじめのある学級だと思いますか。(人の話を聞く、授業に真剣に取り組む等)

あてはまる	19%
まあまああてはまる	46%
合計	65%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

【教師アンケートの結果】

問 37 要支援生徒(発達障がい・不登校・外国籍)への指導・支援を担当者(CD、SS、SC、通級担当等)と協力して行っていますか。

あてはまる	35%
まあまああてはまる	57%
合計	92%

【教師アンケートの結果】

問 38. 要支援生徒(発達障がい・不登校・外国籍)に対する情報を共有し、適切な指導・支援を行っていますか。

あてはまる	35%
まあまああてはまる	52%
合計	87%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

●「方策3」についても、肯定的な数値は高いが、担任と生徒との意識の差は大きく広がっている。「問25」では、教師が生徒の内面を理解できていない現状が浮き彫りとなっている。「問12」も同様に広がりが見られる点から、生徒が「楽しい」と感じる要因の一つに、学校生活の大半の時間を占める「授業時間」に

おける学習規律の有無や学習集団としての温かな雰囲気の有無なども影響しているのではないかと考える。

【欠席率・無遅刻率】（令和2年6月～10月）

出席率	97.9%
無遅刻率	97.8%

A: 98%以上 **B: 97%以上**
C: 96%以上 D: 96%未満

◎不登校の状況と対応

◇昨年度「不登校」を理由に30日以上欠席した生徒のうち、引き続き不登校傾向にあると認められる生徒の内訳は以下の通りである。

合計14名	1年生…4名	2年生…3名	3年生…7名
-------	--------	--------	--------

◇10月末現在、「不登校」を理由に30日以上欠席した生徒の内訳は以下の通りである。

合計18名	1年生…11名	2年生…4名	3年生…3名
-------	---------	--------	--------

◇10月末現在、「不登校」の出現率は以下の通りである

3.06%

◆これらの生徒に対しては、みなみ部会（校内不登校対策委員会）で対応と対策を話し合うとともに、担任を中心に家庭訪問、電話連絡を密に行い、本人・保護者との関係を築きながら登校に向けた働きかけを継続して行っている。全学年主任、養護教諭、生徒指導主事、スクールカウンセラーが参加し、それぞれの立場でさまざまな観点で指導方針の検討がされるので、学年・担任の困り感軽減の一助となっている。

◎みなみ教室（不登校生徒適応教室）の状況と対応

◇昨年度、みなみ教室に登録していた生徒のうち、引き続き登録している生徒の内訳は以下の通りである。

合計7名	1年生…4名	2年生…0名	3年生…3名
------	--------	--------	--------

◇今年度、みなみ教室に登録している生徒の内訳は以下の通りである。

合計11名	1年生…4名	2年生…3名	3年生…4名
-------	--------	--------	--------

◆昨年度に比べて、利用生徒が増加し、個々の生徒が抱える問題は多岐にわたるが、担当教員のきめ細やかな指導・支援により、脱引きこもりや教室復帰に向けて着実に前進している様子がうかがえる。

方策4 通級指導のあり方を検討し、実態に即した支援体制を確立する。

◎通級指導教室の状況と対応

◇昨年度、通級指導教室に登録していた生徒のうち、引き続き登録している生徒の内訳は以下の通りである。

合計3名	1年生…0名	2年生…2名	3年生…1名
------	--------	--------	--------

◇今年度、通級指導教室に登録している生徒の内訳は以下の通りである。

合計10名	1年生…7名	2年生…2名	3年生…1名
-------	--------	--------	--------

◆当初は困り感の自覚が浅かった生徒たちも回数を重ねるごとに自覚を深め、毎時間意欲的に活動に取り組むことができている。活動を通じて文字に対してこだわりをもつようになり、自ら書き直したり、意識的に漢字を使って文章を書こうとしたりするなど、困り感を少しでも減らせるように生徒自身が考える姿も見られるようになった。

◆市内各小中学校の通級指導教室での取り組みを参観しに出向いたり、高校の通級指導の様子を参観したりして、効果的な自立支援方法や生徒理解における留意点はもちろん、小中高のつなぎを意識した取り組みを模索するためにも幾度も自主研鑽に努めている。それをふまえて、一人一人の困り感に寄り添いながら、適性に合った指導を展開することで、該当生徒の安定に効果を上げつつある。

方策5 外国籍生徒の現状を把握し、日本語指導教室担当を中心に、市通訳、SSを活用しながら細やかに対応する。

◎日本語指導教室の状況と対応

◇本年度より、日本語指導教室が2教室開設された。

◇日本語指導教室に登録していた生徒のうち、引き続き登録している生徒の内訳は以下の通りである。

合計21名	1年生・・・15名	2年生・・・3名	3年生・・・1名
-------	-----------	----------	----------

◇日本語指導が必要と思われる生徒に対し、日本語指導や教科指導、日本の学校生活における指導・支援を行った。

◆固定の担当者を配置するのではなく、一教室の指導時間20時間の内訳として、各教科の職員を配置することで、単に日本語の単語をドリル的に練習するのではなく、教科指導を通して、日本語を習得しているような場を設定することができた。

◆通訳が必要な生徒には、昨年度に引き続き、ポルトガル語対応のスクールサポーターを配置し、通訳支援を受けながら指導にあたることができた。日本語の基礎の指導のみならず、学校生活全般にわたって学校・担任・教科担任と生徒をつなぐ貴重な存在となっている。日本の学校で生活することへの不安を抱く生徒の安心・安定につながった。

中期目標c 「集団の中で生徒自身が課題を発見し解決する力の向上（生徒→生徒）」 について

○「生徒自治」の精神を継承・発展させ、学校生活全般にわたって、リーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会・場を保障する。

方策1 生徒議会・生徒総会の質を高め、室長会や委員会との連携を強化することで、生徒スローガンと全体計画をふまえた活動にしていく。

【教師アンケートの結果】

問 20. 委員会、生徒会活動等、生徒の意見を反映した取組を実践していますか。	
あてはまる	9%
まあまああてはまる	78%
合計	87%

【生徒アンケートの結果】

問 20. 委員会や生徒会活動に積極的に参加したり、協力したりできていますか。	
あてはまる	29%
まあまああてはまる	30%
合計	59%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

●アンケート結果には、指導する教師と活動する生徒との自治活動のとらえの違いが表れている。特に、委員会活動については、生徒が自分たちの学校生活をより楽しく、より豊かにするために、何が必要でどうしたら実現できるのか、自分たちで考え、判断し、全校に協力を呼びかけている委員会もいくつかあるが、教師の思いが色濃く反映された活動方針・活動方法となっている委員会は、決められたことを忠実に行う当番活動としての色が強いものもある。教師が委員会活動は何のためにあるのかという観点に立ち、指導方針を見直していく必要がある。そして、学校として目指す生徒の姿を考えていくとき、生徒会活動の質をより高めていくために、活動内容に応じて、委員会活動、当番活動、プロジェクト活動など、生徒組織のあり方などを再考していくことも考えたい。

方策2 生徒会活動や室長会に関して、担当職員が「ファシリテーター」としての役割を再自覚し、「生徒自治」の精神を継承・発展させていこうとする考えに基づいて支援していく。

【教師アンケートの結果】

問 29. 個々の生徒やチームに目標をもたせて活動できるような支援・指導ができていますか。	
あてはまる	13%
まあまああてはまる	70%
合計	83%

【生徒アンケートの結果】

問 29. 自分やチーム（部活動）の目標をもって活動していますか。	
あてはまる	45%
まあまああてはまる	32%
合計	77%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

◇アンケート結果から、教師と生徒が目標に向かって活動している姿がうかがえる。

●目標をもたせることはできても、それに迫らせるための支援・指導の実態まではここからはつかめない。生徒は素直に伸びようとしていることから、教師がその活動を通してどんな生徒を育てたいのかを明確にし、生徒が自ら考え、行動できるような支援ができていくかどうかにもまでふり返りをしていきたい。

方策3 学年目標の達成に向けて室長会を運営し、決定した諸取組を学級へと広げていく。

【教師アンケートの結果】

問 23. 担当する学年は、室長会を中心にした活動ができるように指導がされて（指導をして）いますか。

あてはまる	35%
まあまああてはまる	43%
合計	78%

【生徒アンケートの結果】

問 23. あなたの学年は、室長会を中心にした活動がされていますか。

あてはまる	39%
まあまああてはまる	42%
合計	81%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
 B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

問 24. 担当する学年は、室長会の呼びかけや活動に積極的に参加できるように指導がされて（指導をして）いますか。

あてはまる	22%
まあまああてはまる	61%
合計	83%

問 23. あなたは、室長会の呼びかけや活動に積極的に参加していますか。

あてはまる	29%
まあまああてはまる	45%
合計	74%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

◇室長会を通じて学年の目標の設定や行事のスローガンを考えるだけでなく、日常生活をふりかえり、課題を出し合い、その改善策を出し、学年に呼びかけることも見られている。また、学年の諸活動、行事が室長によって計画・運営されることもある。教師の側からの一方的な指導ではなく、生徒自身に考えさせ、行動を促すという意識を読み取ることができる。室長会に対する意識は教員、生徒ともに高いことから、取組をさらに質の高いものにしていきたい。

方策4 外部団体、小学校と連携したリーダー研修会を運営し、部長会へ繋げる。

◇夏季休業中の二日間にわたり愛知県青年の家において、2年生の生徒会役員、室長、部活動正副キャプテンらを対象として実施予定であったリーダー研修会は、コロナ感染拡大防止の観点から中止とした。

中期目標d 「まちづくりへの協働力・貢献力の向上（地域⇄生徒）」 について

○まちづくりへの生徒の主体的なかかわりの場を保障し、地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める。

方策1 生徒会や美化委員会が、街路樹ボランティア活動、防災訓練を計画・運営・参画する。

【教師アンケートの結果】

問 32. さまざまなボランティア活動に生徒が参加できるように積極的に呼びかけや働きかけをしていますか。

あてはまる	13%
まあまああてはまる	30%
合計	43%

【生徒アンケートの結果】

問 32. 様々なボランティア活動に参加しよう、参加したいという気持ちはありますか。

あてはまる	19%
まあまああてはまる	34%
合計	53%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
 C: 60%以上
D: 59%未満

問 33. 生徒がボランティアの意義を理解し、与えられた活動以外にも自ら活動に向かうように指導していますか。

あてはまる	4%
まあまああてはまる	35%
合計	39%

問 33. ボランティア活動に参加したことはありますか。

あてはまる	43%
まあまああてはまる	19%
合計	62%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
 D: 59%未満

◇街路樹ボランティア・親子除草作業への生徒の参加状況

- ・ 街路樹ボランティア<11月15日(日)実施> 参加生徒数 313名 参加率53.3%
- ・ 親子除草作業 熱中症防止の観点で今年度は中止とした。

◆今年度も教職員・生徒共に「街路樹ボランティア」に多くの参加者が募り、意欲的に作業に取り組んでいた。

●「街路樹ボランティア」が定着している反面、本校において「ボランティア活動とは街路樹ボランティアである」という固定観念が強くあるのかもしれない。

「自分たちで学校生活を豊かにしていきたい」という自発的な意思に基づく自主的な活動がしやすくなるように、教師の発想をより柔軟にして、生徒がそういう思いを出したり実現させる機会を話し合ったりする場を学級会や委員会、室長会などで保証していけるようにしていきたい。まずは、教師自身がボランティア活動の意義を再確認し、どのようにしたら生徒たちが自分事として捉えるようになるのか話し合っていきたい。

ボランティア活動は、個人の自発的な意思に基づく自主的な活動であり、個人の自己実現への欲求や社会参加意欲が充足されるだけでなく、その活動の広がりによって、社会貢献、福祉活動等への関心が高まり、活動者が支え合うことで交流する地域社会づくりが進むなどの大きな意義をもつ。

方策2 本校が様々な地域の支援者に支えられていることを教職員が自覚し、まちづくりへの協働の意識をもち「まちづくり」の一役を学校としてどう担っていけるかを考察する場を保証する。

◇南中学校を様々な面で支えてくださっている地域の方々に対して開催していた「地域交流給食」を、今年度から「南中学校協力者交流会」と名称を変えた。これは、日頃の協力に対する感謝を伝えるだけでなく、給食会食だけでは伝わりにくかった生徒たちの日頃の様子を参観できるようにしたためである。生徒の姿を通して、本校の教育活動に対する理解を深めていただくようにした。さらに、参加者同士の交流の時間を設定し、本校を拠点とした新たなつながりのきっかけとした。

南中学校協力者交流会
▽南中の取組の概要説明 ▽授業参観 ▽参加者交流会
参加者数
▽12団体・19人

◆参加者の声

- ・ 学習支援ステップに通う子どもたちの普段の顔を見ることはでき、先生方がタブレットなどのICT機器を、さまざまなことに工夫されていることに大変驚きました。ステップでも子どもたちにできることをさらに挑戦していこうという気持ちになりました。子どもたちを見守る大人がこんなに多くいらっしゃることも、南中ならではのと思いました。
- ・ 人と人の交流する機会が増えて、子どもたちの成長をより促進できるのではないのでしょうか。

●形を変えたもう一つの理由に、「地域交流給食」には一部の生徒・教員しか参加できていない現状があったので、それ以外の大半の生徒・教職員には、本校がどういう方々に支えられているのかさえ知らない状態であった。本校が「地域に支えられ、地域に貢献する」ことを意識して学校づくりに取り組む以上、まずは教職員がそのことを自覚していくことから始めていかねばならない。そのためにもアンケート項目に追加していく。

◇南中学校の各教室には、高浜市文化協会の会員の絵画やオブジェが展示されている。昨年までは、校内文化委員会の生徒と会員との共同で作品入替作業を行っていた。今年度は、会員と生徒との直接的な交流を深められないかと考え、会員の作品制作にかけける作者としての思いを伝える場を設けた。その思いを受けた学級代表が同級生に伝達することで、生徒たちがその作品を鑑賞する際により深く味わえることをねらった。

高浜市文化協会との交流会
▽会員同士の交流会 ▽作品入れ替え作業 ▽生徒と会員との交流会
参加会員数と展示作品数
▽22人 ▽23作品

◇年度末には、生徒たちからの作品鑑賞文をお渡しする予定である。

●今年度交流した生徒は、展示教室に在籍する有志ボランティアを募ったが、作者の作品にかけける思いを聞くことができる場があるのならば、美術部生徒の参加も価値があると考ええる。

方策3 ホームページ、ブログ等で学校の方針、活動のねらいと生徒の様子を積極的に情報発信する。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 34. 保護者や地域の方が見たくなるような情報を学校のホームページやブログに載せていますか。

問 34. 学校のホームページやブログを見ますか。

アンケート結果

あてはまる	13%
まあまああてはまる	35%
合計	48%

あてはまる	14%
まあまああてはまる	22%
合計	36%

(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
D: 59%未満

【保護者アンケートの結果】

問 17. 学校のホームページやブログを見ているですか。

あてはまる	18%
まあまああてはまる	34%
合計	52%

◇ブログ閲覧者数(4月～10月)
 1日平均

A: 1日平均200以上 **B: 100以上** C: 100未満

◆保護者アンケートの結果からは、紙媒体の「たより」は高い割合で読んでいることが分かる。生徒の学校生活の様子を紹介するブログと違い、行事日程や集金など確実に知っておきたい各種連絡事項の確認を大切にしている。媒体の特性に応じた情報の発信を考えていく必要がある。

◆各学年ともこまめに生徒の様子を紹介している。特に、学校行事の日には閲覧数が高く、仕事で来校できない保護者の支えになっている。

方策4 スマホ対策講演会やリーダー研修会において地域と協働する機会を継続する。

◇スマホ対策については、今年度も入学説明会の折に保護者、新1年生生徒を対象にした講演を予定していたが、コロナウイルス感染拡大防止のため、入学説明会を中止にし、各小学校において説明資料配付とした。

☆ 勤務時間縮減に向けた取組の推進

方策1 業務改善委員会を立ち上げ、職員自らが業務を見直し、削減・縮減の提案をする。

◇第1回の業務改善委員会を夏休み前に開催した。

●職員に対するアンケート結果からは、業務の見直しの意識は見られるものの、組織としての視点をもって行動するには至っていないことがわかる。次年度からは、「1か月45時間」が定められる。いよいよ自分事として捉えていかねばならない。あらためて業務改善委員会の役割を職員に浸透させ、機能させるようにしていくことが課題である。

【教師アンケートの結果】

問 39. 在校時間縮減に向けて業務を見直し、改善につながる取組を行っていますか。

あてはまる	22%
まあまああてはまる	39%
合計	61%

問 40. 在校時間縮減につながる提案を学年職員、業務改善推進委員会に対して行っていますか。

あてはまる	13%
まあまああてはまる	22%
合計	34%

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
D: 59%未満

◇業務改善委員会 第1回 4月6日開催 提案数10件
 実施回数 A: 3回以上 B: 2回 **C: 1回** D: 0回
 提案数 A: 20以上 **B: 10以上** C: 5以上 D: 4以下

◇職員の在校時間
 4月～10月 平均在校時間数 51.7時間

方策2 地域団体の代表者やPTA役員等を通じて、地域や保護者に学校の実情を発信し、勤務時間縮減の取組について理解の促進を図るとともに、協働して取組を推進する。

◇マスコミ等の報道により教員の長時間労働が広く認知され、勤務時間縮減について地域や保護者の理解が得られやすい環境が整ってきている。次年度からはじまる「1か月45時間」についてもPTA役員会等で話題に出し、学校行事の短縮や部活動の縮小等について理解を図る基盤を築いていく。